

慢性期の重症頭部外傷患者における脳血流SPECT —ECD-SPECTによる50例の検討—

自動車事故対策機構 千葉療護センター 脳神経外科

〇小瀧 勝、内野 福生、岡 信男

【目的】慢性期における重症頭部外傷患者の脳病態については不明な点が多いが、その病態解明のため脳血流を測定して、臨床症状と比較検討した。

【対象・方法】交通事故により頭部外傷を受け、重度の後遺症の治療ために入院した50例を対象とした。SPECTはECDにより脳血流パターンについて検討した。臨床症状は当センターの「レベル判定表」により判定した。受傷時の年齢、入院までの期間、レベル判定表によるスコア(最低0点、最高が100点)について検討した。

【結果】受傷時の年齢は平均34.0歳、入院までの期間は平均3.0年であった。脳血流SPECTは1型(両側前頭葉の低下)5例、2型(一側半球の低下)14例、3型(両側の低下)15例、4型(局所の低下)16例に分類された。1型はdiffuse injury4例、頭蓋内血腫1例で、2型はdiffuse injury2例、頭蓋内血腫12例で、血腫側に血流の低下が見られた。3型はdiffuse injury9例、頭蓋内血腫6例、4型はdiffuse injury12例、頭蓋内血腫4例であった。一方、臨床症状の評価では、全体のスコアは8-95点(平均37点)であった。1型は8-47点(平均22点)、2型は11-95点(平均33点)、3型は6-41点(平均20点)、4型は40-88点(平均62点)であった。

【まとめ】1)慢性期の重症頭部外傷患者において、脳血流SPECTにより34例(68%)に広範な血流の低下を認めた。2)脳血流の低下が局所の群(4型)では、他の群に比べスコアが高値であった。